

皇居

徳川幕府の居城（江戸城）であったものが、明治元年に皇居となり、明治 21 年以来、「宮城」と称されていましたが、昭和 23 年、宮城の名称が廃止されて、「皇居」と呼ばれるようになりました。

「**皇居**」内には、諸行事を行う宮殿、宮内庁関係の庁舎、紅葉山御養蚕所などの建物があります。皇居の制限エリアを一般人が訪問できる機会としては、「皇居一般参観」のほか、毎年 1 月 2 日と天皇誕生日に行われる「一般参賀」や桜が見ごろの 4 月初旬と紅葉が見頃の 12 月初旬に行われる「乾通りの通り抜け」などがあります。皇室関連施設のうち、宮殿や宮内庁庁舎などは旧西の丸に位置しますが、天皇の住まいである御所は江戸城の「吹上」、現在の「吹上御苑」に建てられています。

旧江戸城の本丸、二の丸、三の丸などは「**皇居東御苑**」として、1968 年（昭和 43 年）10 月 1 日以降、宮中行事に支障のない限り一般に公開されている。「**北の丸公園**」と「**皇居外苑(皇居前広場)**」は自由に出入りできる公園となっている。

※ 京都御所

法律上の位置づけは東京の皇居などと同じく皇室用財産。明治天皇の東京行幸後に首都機能が東京に移った際、明確な遷都の法令が発せられなかったので、京都御所を現在も皇居とみなす向きもあり、現役の皇居として扱われます。1337 年（建武 4 年）から 1869 年（明治 2 年）までの間内裏・禁中・禁裏・宮中と呼ばれました（歴代天皇並びに後宮や世子などが居住し朝廷として儀式・公務を執り行った場所で、現在の皇居とほぼ同義）。現存する建物は概ね 1855 年（安政 2 年）に造営した安政の内裏です。現在の京都御所は、宮内庁京都事務所が管理しています。

徳川家康江戸入府

豊臣秀吉に国替えを命じられた家康が江戸に入ったのは天正 18 年（1590 年）8 月 1 日だった。慶長 8 年（1603 年）に征夷大將軍になると幕府の本拠としての都市建設に着手した。葦が生い茂る低湿地の寒村だった江戸を 100 万人が暮らす世界最大級の都市に発展する基礎を築いた功績からして、家康の入府はまさに一大事件であった。当時の日比谷は入江だったので現在の甲州街道（麴町大通り）を通過して当時は存在しない半蔵門あたりから城内に入ったと思われる。

竹橋御門跡

北の丸東の出入り口で元和 6 年（1620 年）平川門と同じく仙台藩伊達政宗らにより築かれた。天下祭り（神田明神と日枝神社の例大祭）の山車行列が通過したのもこの間だった。門は閉鎖されてしまったが平川門につながる細長い帯曲輪は健在です。

太田道灌公追慕の碑

江戸東京の繁栄と発展の基礎を築いた室町時代の武将太田道灌の追悼簿。長禄元年（1457 年）太田氏は現在の皇居東御苑あたりにわずか 1 年で江戸城を築城したと言われています。この碑の石材は虎の門の石垣に使用されていたものだそうです。

平川門

三の丸正面の平川門は元和 6 年（1620 年）に仙台初代藩主の伊達政宗らによって築かれた。別名「お局門」と呼ばれているのは、本丸大奥に通じているため、奥女中が通用門として使用していたからこの呼び名が付いた。また、城内での死者や罪人などの出口としていたため「不浄門」とも呼ばれる。

※ 江島・生島事件

正徳 4 年（1714 年）、一人の女性が江戸城を追放され、平川門（不浄門）から信州へと送られた。7 代将軍・家継の生母・月光院に仕える御年寄（大奥女中の最高実力者）の江島である。

2月26日江島は月光院の名代として上野寛永寺と芝増上寺に参詣した江島はその帰途、山村座に赴いた。歌舞伎見物、役者・生島新五郎らとの酒宴を楽しんだが帰城の門限（夕方4時ごろ）に遅れたことが大問題となった。さらに生島との情通を追及され、江島は信州にお預け、生島は三宅島に流罪。ほか関係者1500人が処分された。だが、二人の密通は事実無根で、月光院派の失脚を狙った、6代将軍家宣の正室・天英院派の陰謀だったともいわれる。（江島が遅刻したことは事実である）

和氣清麻呂像（わけのきよまろぞう）

奈良時代から平安時代の転換期に活躍した人物。光仁・桓武天皇が信頼を寄せ、平安遷都の推進、造部において活躍した和氣清麻呂。奈良朝末期の廷臣で藤原仲麻呂の乱で天平神護1年（765年）に右兵衛尉となり信任を得た。794年平安京遷都では新しい都づくりの責任者となり、1,200年以上続く「京の都」の基礎を築きました。

一橋徳川屋敷跡 千代田区大手町1丁目4-2

徳川将軍家を支えた御三卿は8代将軍・吉宗の子や孫を始祖として創設され、それぞれの屋敷の所在地付近にあった城門の名前にちなんで、田安、一橋、清水と呼ばれました。このうち一橋徳川家の屋敷は、一ツ橋門内にあったことが知られていましたが、明治期以降軍用地などとして開発が進んだことから、本格的な発掘調査の機会はありませんでした。平成29年（2017年）に初めて実施された発掘調査では、庭園の池跡や堀の遺構がみつかり、日本橋川と江戸城内堀に挟まれた屋敷地の様子の一部が明らかになりました。

御三家と御三卿

○御三家

御三家・御三卿の本質的な目的は「将軍家の血筋と権威の保険」を作ることです。

徳川家康は、自分の直系に跡継ぎがいなくなる事態を恐れ、自分の子どもたちのうちから尾張・紀伊・水戸の三家を特別に高い家格の「親藩トップ」とし、将軍家の後継候補にしました。これにより、将軍家に男子が絶えた場合でも、御三家から将軍を立てて徳川政権を継続できる体制を整えました。

御三家からは第7代将軍・徳川家継が早世した際に紀伊家から徳川吉宗が第8代将軍となり、幕府体制は維持されました。

○御三卿

御三家だけでは不十分になったために追加された“予備の予備”の将軍家です。

8代将軍徳川吉宗の時代になると、将軍家の後継問題が再び不安定になりました吉宗は自分の息子たちに城内屋敷と家格を与え、田安家・一橋家を興し、のちに清水家加わって「御三卿」が成立します。

御三卿御の一橋家から11代将軍徳川家斉（いえなり）が出ています。

（最後の十五代将軍・徳川慶喜も一橋家に関わりますが、形式上は水戸徳川家から出た将軍と扱われます。）

御三家だけでは将軍候補が十分に確保できない局面が見えてきたため、「将軍家直系にさらに近い血筋の“将軍予備軍”」として御三卿が置かれた、というイメージです。

田沼意次（おきつぐ）屋敷跡 千代田区大手町1-3付近

江戸時代中期の旗本、大名、江戸幕府老中。遠江相良藩田沼家の初代藩主。第9代将軍徳川家重（いえしげ）と第10代家治（いえはる）の治世下で側用人と老中を兼任して幕政を主導した。安永元年（1772年）から天明6年（1786年）にかけて、老中田沼意次が主導した幕政改革を田沼意次の政治と呼ばれます。それまでの重農主義（年貢＝米に頼る政策）から重商主義（商業の力を活用する政策）へと方針を大転換し、株仲間の奨励・蝦夷地開拓・南鐐二朱銀の発行などの先進的な政策を打ち出しました。

「賄賂政治家」として悪名高い田沼意次ですが、非常に先進的な政策を実行した改革者でもありました。

将門塚・平将門の首塚（しょうもんづか、まさかどのくびづか） 千代田区大手町一丁目 2-1

平将門（延喜3年〈903年〉～天慶3年2月14日〈940年3月25日〉）の首を供養するとされる塚（首塚）である。東京都指定の旧跡となっている。元は古墳であったと考えられています。

将門は平安時代中期、関東で反乱を起こして敗死した（承平天慶の乱）。処刑をされたあと平安京で晒し首にされるが将門の首は何か月たっても眼を見開き、歯ざしりしているかのような状態だったといわれています。ついには空に飛び立ち、故郷の関東にむけて飛んでいったとの説もあります。（降り立ったのが將軍塚の場所）将門塚がある地はかつて武蔵国豊嶋郡芝崎村と呼ばれ、住民は長らく将門の怨霊に苦しめられてきたという。徳治2年（1307年）、諸国を遊行中であった僧「阿真教」が将門に「蓮阿弥陀仏」の法名を贈り、荒れ果てていた首塚の上に自らが揮毫した板碑を建立して整備し、かたわらの天台宗寺院日輪寺を時宗芝崎道場に改宗したという。日輪寺は、将門の「体」が訛って「神田」になったという神田明神の別当として将門信仰を伝えてきた。その後江戸時代になって日輪寺は浅草に移転させられるが、今なお神田明神とともに首塚を護持している。

大正時代、1923年の関東大震災で塚が倒壊したのを機に、再び将門の怨霊は猛威をふるい始める。具体的には、この地で不自然な事故や災害が相次いだ。

例えば、将門塚の跡地に旧大蔵省が庁舎を建てようとしたところ、工事関係者や省の職員に不幸が相次いだのは有名な話である。そればかりか、できあがった庁舎を雷が直撃したり、時の大臣が急死したりと、不審な事故が立て続いて発生する。

さらに戦後に入ってから、焼け野原となっていたこの地にGHQが駐車場を造成しようと工事を始めたところ、重機が横転する死亡事故が発生。こうした災いは枚挙にいとまがなく、気がつけば将門は、崇徳上皇と菅原道真と共に「日本三大怨霊」に数えられることとなる。

大手門

築城名手として知られた津藩の初代城主**藤堂高虎**らにより慶長年間（1596～1615）に創建された。江戸城の正門にあたり、参勤交代で江戸城に滞在していた大名たちが、深淵や月次で登城する際に使用された。現在の門は1987年（昭和42年）に復元されたものです。

※ 日本の城郭における内部二の丸または、三の丸などの曲輪へ通じる大手虎口に設けられた城門。城の正門にあたる。元は追手門（おうてもん）と書かれ、城によっては現在も追手門と表記しているところもある。これに対して背面の門は搦手門（からめてもん）と呼ばれる。



江戸城大手門

和田倉門跡

「行幸通り」の北側に位置する和田倉門は元和6年（1620年）に仙台藩主伊達政宗らによりつくられた。現在の復元された橋は木橋を模したコンクリート造りですが、まわりの濠などと調和した美しい景観です。江戸情緒を感じさせられます。

和田倉門は武士のみが通ることが許されていたとのこと。徳川氏が江戸城に入った頃、この辺りを蔵地としたので、この名称をとったそうです。

※ 和田倉噴水公園

昭和36年に上皇陛下の御結婚を記念して創建された大噴水を、平成5年6月の今上天皇の御結婚を機に、「継続と新たな発展」をテーマに再整備し、平成7年6月に完成したものです。

整備にあたっては、和田倉地区が水と緑で構成された表情豊かで風格のある空間として、末永く国民の皆さんに親しんでいただけるよう配慮されました。具体的にはこれまでの大噴水の原型を活かしつつ装いを一新した噴水に、躍動感あふれる落水施設（滝）や静かに流れる流水施設（せせらぎ）を

新たに加えるとともに、周囲の豊かな緑にも十分配慮し、「継続と新たな発展」を象徴する変化に富んだ水と緑の風景として創出されました。(大噴水と新噴水公園の施設の一部は、民間資金により整備され、寄附されたものです。)

桔梗門（内桜田門）

江戸城本丸南口の通用門で、本丸へ向かう際には、大手門と並ぶ登下城の門でした。そのため、門の警護は譜代でも6〜7万石の大名があたっていました。内桜田門と呼ばれ、外桜田門（現在の桜田門）に対しての呼称ですが、江戸時代から桔梗門(きぎょうもん)という別称が用いられていました。別称の由来は定かではありませんが、寛永の頃、上洛する際に御帰京の祝儀を表したから、あるいは、徳川家康入府の際、太田道灌時代の名残を残す桔梗紋の瓦が残っていたからといわれています。門の鬼瓦には、現在でも桔梗紋が施されています。

門は1614年（慶長19年）に造られたもので、桔梗濠沿いの石垣も1620年（元和6年）に造築されています。現在も手前の高麗門(こうらいもん)と右手の渡(わたり)櫓門(やぐらもん)からなる枅形門(ますがたもん)が残っています。

坂下門

門の名は、西の丸から低地に降りる坂下にあたることに由来します。この門は、江戸城西の丸造営直後に築造され、江戸時代は木橋が架かっていましたが、現在は土橋となっています。現在、正面から見ると渡櫓門があり、本来は、高麗門を備えた枅形でした。坂下門は江戸城西丸造営直後に造られたと伝えられています。西丸大奥に近く、西丸の通用門として利用されていましたが、今は宮内庁の出入口として利用されています。1887年（明治20年）に高麗門が撤去され、渡櫓門を現在の場所に設置しました。

※ 坂下門外の変

老中安藤信正は、井伊直弼亡きあと開国政策を継承。幕閣の中心となり、公武合体に奔走し、和宮の降嫁を実現する。こうした施策が尊王攘夷派の反感を買い、将軍・家茂と和宮の婚礼直前の文久2年（1862）1月15日、現在の皇居前広場に面する坂下門外で、水戸脱藩の志士らに襲撃された。襲撃者はその場で斬殺、安藤は命こそ取り留めたが、3か月後に老中を罷免された。

※ 和宮降嫁（かずのみやこうか）

老中阿部信正は朝廷との融和により幕府の権威を回復しようと考え、朝廷に14代将軍・家茂（いえもち）への降嫁を求めた。孝明天皇は「譲位（外国人を打ち払って国内に入れない）」を条件に妹・和宮の降嫁を決めた。文久元年（1861年11月15日）和宮一行は江戸に到着し、清水邸に入った。この時和宮の行列はおよそ6,000人にも及ぶ絢爛豪華なものだったという。婚礼は翌年2月11日に行われました。

皇居外苑

現在の皇居外苑は、江戸時代は西の丸下と呼ばれ、幕府老中などの屋敷が広がっていました。近代に入り「宮城外苑」として整備され、「新宿御苑」、「京都御苑」と共に旧皇室苑地の一部が「国民公園」として広く国民一般に開放されました。皇居前広場を中心とした皇居外苑地区、皇居の北側に位置する北の丸地区、皇居を取り囲む皇居外周〈12か所の濠〉に大別され、総面積は115hr（このうち濠の水面部分の面積は37hr）に及びます。

皇居外苑地区は、クロマツの点在する大芝生広場と江戸城のたたずまいを残す濠、城門などの歴史的建造物が調和し、わが国を代表するシンボリックな公園として親しまれています。

明治維新後は一時、明治政府の官衙・兵営に利用されましたが、明治10年代以降、広場として整備され現在に至ります。

二重橋

皇居正門から長和殿へ向かう途上、二重橋濠に架かる鉄橋のことで、本来の名称は二つある奥にある「正門鉄橋（せいもんてつばし）」のことを言います。正門鉄橋は慶長 19 年（1614 年）に二重構造（木造）だったことが名前の由来です。現在の橋は、昭和の新宮殿造営に先立ってかけ替えられました。

正門鉄橋と、皇居前広場側に掛かる正門石橋の二つの総称として二重橋と言われることもある。

正門には皇宮警察の皇宮護衛官の儀仗隊がおり、通常一般人は二重橋を渡ることはできない。ただし、事前に手続きをして皇居の参観をする場合は、鉄橋を渡ることができる。また、新年や天皇誕生日の皇居一般参賀時には正門が開放され渡ることができる。

※ 2025 年 8 月 健康歩こう会特別例会で「皇居参観」を実施した際、正門鉄橋を渡る事が出来ました。（23 名参加）



二重橋

楠正成公

楠木 正成（くすのき まさしげ）は、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての武将。出自は諸説あり。息子に正行、正時、正儀。

元弘の乱（1331 - 1333 年）で後醍醐天皇を奉じ、大塔宮護良親王と連携して、千早城の戦いで大規模な幕軍を千早城に引きつけて日本全土で反乱を誘発させることによって、鎌倉幕府打倒に貢献した。また、建武の新政下で、最高政務機関である記録所の寄人に任じられ、足利尊氏らとともに天皇を助けた。延元の乱での尊氏反抗後は、新田義貞、北畠顕家とともに南朝側の軍の一翼を担ったが、湊川の戦いで尊氏の軍に敗れて自害した。建武の元勲の 1 人。明治以降は「大楠公（だいなんこう）」と称され、明治 13 年（1880 年）には正一位を追贈された。

銅像の姿は楠正成こうが正慶 2 年（1333）年に隠岐の島から還幸途次の後醍醐帝を兵庫でお迎えしたときのものです。別子銅山の銅を使い、高浦光雲らが 10 年の歳月をかけて完成させました。

馬場先門跡

内濠に架かり、丸の内二・三丁目の間から皇居正面に通じる土橋です。馬場先門は寛永 6 年（1629）に広島藩の初代藩主浅野長晟らによって造られました。門名の由来は、三代將軍徳川家光が門内の馬場で朝鮮使節の曲馬を上覧したことから、朝鮮馬場の名が生まれ、馬場先の名が付けられました。橋の北側は馬場先濠、南側は日比谷濠です。日露戦争勝利の提灯行列が、この門にはばまれて大勢の死傷者が出たため、明治 39 年（1906）に枡形は撤去されました。現在は石垣の一部だけ残っています。

祝田橋

内濠に架かり、皇居外苑南側から霞が関一丁目と日比谷公園の間に通じる土橋です。明治 39 年（1906）、日露戦争勝利記念の凱旋道路開通の際、架けられました。橋名の由来は、皇居外苑側が祝田町という町名であったことによります。橋の西側は凱旋濠、東側は日比谷濠です。

桜田門

江戸時代には「外桜田門」と呼ばれ、江戸五口の一つだった。江戸城の枡形門では最大規模を誇り重要文化財に指定されている。1860 年（安政 7 年）3 月、登城するため屋敷を出た大老井伊直弼が水戸藩士らの襲撃を受けたのは、桜田門外の堀端でした。

※ 桜田門外の変

1860 年（安政 7 年）3 月 3 日江戸は朝から大雪に見舞われた。江戸幕府の最高実力者であった大老・井伊直弼は上巳の節句（雛祭り）で登城の途中、桜田門に手前で水戸浪士らによって暗殺された。事件は、大老に就任した井伊が勅許（朝廷の承認）を得ずに日米修好条約に調印したことに端を発する。幕府の強引な進め方に批判の声が高まると井伊は、外国を排除しようとする攘夷論者をはじめ、多数の反対派を弾圧した。吉田松陰らの獄死でも知られる「安政の大獄」である。この時、徳川御三家の一つである水戸藩までも弾圧の対象となった。尊王攘夷思想を抱く一部の過激な水戸浪士らが、反発して井伊暗殺に及んだのである。

半蔵門

江戸城の西側内堀通りに面する半蔵門は江戸城の重要な出入口。江戸五口の一つで甲州街道の出発点でもある。1620 年（元和 6 年）築造のこの門の名は、旗本服部半蔵正成が麴町に組の屋敷を拝領し、警戒にあたったことに由来すると言われています。

乾門

乾門は江戸城の乾（いぬい＝戌亥／北西）の方向にある門の一つですが、明治 21 年、皇宮建設の際に新たに誕生した「明治の門」。坂下門の内側にあった西の丸裏門を移築したものです。新年一般参賀、桜の開花期、秋の紅葉の時期に行なわれる「皇居乾通り一般公開」の際に出入り口として使用されます。

北詰橋

内濠（平川濠・乾濠）に架かり、皇居東御苑の北側にあります。江戸城北桔橋門の橋で、有事に備えて橋が跳ね上がる仕組みになっていました。太田道灌の時代には、この付近が城の大手（正面）であったと伝えられています。江戸時代は門を入った所に江戸城本丸の天守閣がありました。現在は、冠木門と橋だけが残っています。